

Juichi WAKISAKA Race Report

2015 AUTOBACS SUPER GT Round 7 - SUPER GT in KYUSHU 300KM -

◆◆ 果敢な攻めで全戦ポイント獲得を継続 ◆◆

No. 19 Weds Sport ADVAN RC F		
Drivers	Qualifying	Final
脇阪 寿一 / 関口 雄飛	6位	9位



■大会概要

開催日：2015年10月31日-2015年11月1日

サーキット：オートポリス（大分県日田市、コース全長：4.674km）

レース距離：65周（303.81km）

入場者数：予選日11,340名、決勝日22,680名、合計34,020名

10月31日、11月1日、大分・オートポリスにおいて2015年SUPER GT第7戦「SUPER GT IN KYUSHU 300km」が行われた。脇阪寿一はコンビを組む関口雄飛選手とともにNo.19 WedsSport ADVAN RC Fを駆り、予選6番手の好位置からスタートを切った。思うように上がらない気温、冷えた路面、途中から降り出した小雨など、厳しいコンディションとの戦いにもなる中、タフなレースを走破。9位でフィニッシュし、開幕戦からの連続ポイント獲得をまたも達成している。

■10月31日(土)

09:00-10:45 公式練習（10:55-11:15 サーキットサファリ）

13:50-14:05 ノックアウト予選（Q1）

14:35-14:47 ノックアウト予選（Q2）

【公式練習】 14番手 / 1'35.211

いよいよ今シーズンもセミアイナルラウンドを迎えたSUPER GTだが、ますます過酷な戦いを迎えている。今回の舞台となるオートポリスは、10月上旬にタイヤメーカーのテストが実施されており、そこで手応えを得ているチーム、そして脇阪はなんとしてもこのレースで好機をつかみ、表彰台、ひいては優勝を狙おうとセッションを迎えた。

午前9時、オートポリスの気温は8度、路面温度は13度と秋深まる山あいならではの寒さを迎える。幸い、やわらかな日差しに恵まれ、セッション終了時には気温12度、路面温度は24度まで上昇することとなった。

開始からほどなくして1台の車両がコントロールを失い、スピン。車両改修などの作業のために赤旗中断となった。再開は9時23分。No.19 WedsSport ADVAN RC Fには関口選手が乗り込み、クルマの状況を確認、周回を重ねていく。また、GT500の専有走行では脇阪がドライブ。コンディションが向上したこともあり、併せてラップタイムも更新、1分35秒211のチームベストをマークするなど順調にメニューを消化、14番手でセッションを終了した。



【ノックアウト予選 (Q1)】 4番手 / 1'33.488

公式練習後もオートポリスの好天気は続き、穏やかなレース日和となる。GT500クラスのQ1を迎える頃には、気温12度、路面温度27度と気温こそ午前中とほぼ変わらないが、路面温度が上がったことで、アタック合戦がよりいっそう激しく過酷なものとなることが予想された。午後1時50分、Q1のアタッカーを務めたのは、関口選手。どのタイミングでコースへ向うのか、そこからライバル達との戦いになるほど緊迫した空気がサーキットを包む。タイヤへしっかり熱を入れるため、関口選手はライバルより早くピットを離れ、アタックへと入った。ラストアタックで1分33秒488の好タイムをマーク、ポジションは4番手へとジャンプアップ。No.19 WedsSport ADVAN RC Fは今シーズン3度目のQ2進出を果たすこととなった。

【ノックアウト予選 (Q2)】 6番手 / 1'33.883

脇阪がアタックを担当するQ2は、午後2時35分からスタート。気温12度、路面温度28度と、Q1とほぼ同じコンディションが保たれている。チームでは、朝の公式練習、その直後のサーキットサファリでの走行時間で行ったクルマのセッティング、そしてタイヤ選択がいい方向に進んでいることを確信しており、自信を持って脇阪をコースへと送り出した。ともにクルマ作りに取り組んできた脇阪も果敢なアタックを披露。コースレコードを更新するタイム、1分33秒883をマークして6番手のポジションを獲得。今シーズンチームベストのスターティンググリッドを手にした。

「今回のQ2では、アタック前に“イヤだなあ”という気持ちがまったくなく、うまくいけばポールポジションもいけるのではないかと、というくらいメンタル面での安定がありました。チームもその辺をうまく理解してくれており、僕を見守ってくれるというか、任せてくれています。アタックを振り返ると、もう少し行けたような感覚もありますが、自信にもつながりました」と穏やかな様子でアタックを振り返った脇阪。朝の走行では路面温度が低く、気にかけていた部分もあったというが、「気温も路温も上がり、テストでの想定レベルに入ってきているのがわかりました。もちろん、決勝後半の気温低下を想像しながら、セットとタイヤの準備はしていますが、それもいいものだし、朝の走行とサーキットサファリで試したタイヤが良く、予選に向けていい選択ができました。そこからチームが波に乗っている感じがしますね。明日もこのまま良い流れを継続できればいいなと思います」と、手応えある予選だったと語った。

一方、決勝日の天気に触れ、「雨にさえならなければ行けると思う。もし雨が降ると、第5戦鈴鹿の時にそうだったように、ラップタイムがライバルより1周あたり2〜3秒遅い可能性もあるでしょうね。我々のタイヤはドライコンディションでのパフォーマンスが非常に良いのでなんとかドライで行きたい。タイヤのピックアップがあるというライバルに対し、僕らは淡々と走る戦いができればチャンスもある。安定したタイムを刻み、あとはライバルの動向を見ながら戦いたいですね」と展開を予想。そして、「これまで鈴鹿やSUGOのように、こういうことがなければ…という戦いがあったので、今回はキチンとレースをしてそろそろスポンサーはじめ、ファンの皆さん、またチームのみんなにもいいところをお見せして喜んでもらいたいと思っています。大量ポイントを獲れればチャンピオン争いにも残れる可能性があるし、感謝の気持ちも込めていい走りをお見せしますよ」と締めくくった。



■ 11月1日(日)

09:00-09:30 フリー走行

14:00- 決勝 (65周)

【フリー走行】 8番手 / 1'37.372

決勝日の朝は、青空が去って薄曇りの空が一面に広がったオートポリス。加えて冷たい風が吹き、早くも冬の到来を感じさせるような寒さが先行した。それでも九州で唯一開催されるシーズン大詰め戦いをひと目見ようと、サーキットには2万2千人を超える観客が来場。戦いの行方を見守った。

フリー走行は午前9時にスタート。気温9度、路面温度11度と前日の練習走行よりも路温が低い中、30分のセッションが行われる。No.19 WedsSport ADVAN RC Fにまず乗り込んだのは、関口選手。決勝に向けての最終確認を始めた。その後、脇阪もステアリングを握って同様にクルマの状態を確認。チームベストタイムとなる1分37秒372をマークし、8番手でセッションを終了。いよいよ決戦に向けて最終の準備は整った。



【決勝】 9位 / 2ポイント獲得 (シリーズポイント: 26ポイント、シリーズランキング: 11位)

昼のピットワーク時にはやや日差しも出て肌寒さは和らいだが、その一方でパドックでは雨を懸念する声が出はじめていた。早朝の予報では決勝後、夕方遅くに降雨の可能性があるとことだったが、そのタイミングが早まるのでは、という話になってきており、なにやら落ち着かない空気が流れていた。

そんな中、気温14度、路面温度18度のコンディションの下、65周にわたる戦いの火蓋が切って落とされる。No.19 WedsSport ADVAN RC Fのスタートドライバーは関口選手。前方3列目からクリアスタートを切り、早速前方の64号車 NSXを逆転。5番手へと浮上する。4番手には同じADVANタイヤを装着する24号車 GT-R。コンディションが安定すると、果敢な攻めの走りを見せてチャンスを窺う。その一方で、後方との攻防戦も激化。さらには周回遅れのGT300をうまくかわしながらの走行を続けるタフな戦いとなり、結果、近づくルーティンワークまで5番手をキープすることとなる。

レースは折り返しを前に3コーナー辺りで微雨という情報が入る。25周を過ぎると1~2コーナーにかけて雨となり、コース上の車両がワイパーを作動させる様子がTVモニターに映し出された。30周前後からライバル達はルーティンピットワークを開始。だが、No.19 WedsSport ADVAN RC Fは天候の推移をしばし見守ろうと作業を遅らせて38周終了時に実施、ミスなく素早い作業で脇阪をコースへと送り出した。

小雨降る中、コースに向った脇阪の足下には関口選手とは異なるタイヤが装着されていた。順調なラップタイムを刻んではいたが、変化し続けるコースコンディションではなかなか本来の走りを継続させるのが難しく、タフな戦いが強いられる。懸念していたタイヤのピックアップも始まり、

その結果、走行ラインが乱れたはずみで不運にも濡れた縁石に乗ってしまいスピンを喫することとなったが、幸い大事には至らず。コース復帰を果たし、周回を続けた。

レース終盤には No.46 GT-R や No.15 NSX との熾烈なバトルを演じる。追いつがる No.46 GT-R を抑えつつ、No.15 NSX が GT300 に詰まった瞬間を逃さずオーバーテイク、6 番手へと浮上。その後も No.46 GT-R との激しい 6 番手争いを巧みなドライビングで制し続けた脇阪だが、ファイナルラップの 1 コーナーで勝負を賭けた 46 号車の猛追に遭い、惜しくもコースアウト。そのままクルマはグラベルにストップしてしまう。結果、チェッカーを受けることは叶わなかったが完走扱いとなり、No.19 WedsSport ADVAN RC F は 9 位で長くタフな戦いを終えることになった。



「今日のレースでは、途中からタイヤのピックアップが酷かったですね」と戦いを振り返った脇阪。「途中、スピンもあったし、ずっと接戦だった本山さん（46 号車）に最後に並ばれてしまった。その前には一度抜かれた小暮選手（15 号車）を抜き返して 6 番手を走っていたんですが、最後の最後、本山さんのプレッシャーに負けてしまい、コースアウトしてバンカーストップとなりました」と悔しさをにじませる。一方で「レース中の自分のミスは情けないし、悔しい。色々な思いがあるけれど、レース中は自分が嫌いとする小雨の中、ドライタイヤで攻めの走りができたのも事実」と最後まで攻めのレースを貫いた点にも触れ、「守ってミスをしたのではなく、攻めた上での出来事だった」とした。

悔しさ残る 9 位フィニッシュではあるが、チームとして継続している全戦ポイント獲得は達成。ノーウェイトのガチンコ勝負となる最終戦では、今年の集大成となる走りを披露してくれるに違いない。

次戦は、11月15日(土)-11月16日(日)にツインリンクもてぎ（栃木県芳賀郡）にてシーズン最後のレースが開催される。

[Photo Gallery]



